

「テッペンカケタカ」

夜が白み始めるころ、遠くから甲高い鳥の鳴き声に目が覚めました。久しぶりに聞く鳴き声です。鳥のさえずりというかわいらしいものではなく、川を越え、辺り一面に響き渡る澄んだ鳴き声です。私の耳には「テッペンカケタカ」と聞こえますが、以前からそう聞こえたわけではありません。「キョッキョッ キョッキョッキョ」と不思議なリズムで聞こえるので、理科の先生に尋ねると「ホトトギス」で、鳴き声は「特許許可局」や「テッペンカケタカ」と覚えるといいと教えてくれました。これは、鳥や動物の鳴き声を人の言葉や文字に置き換えることで、「聞き做し」と言うそうです。

ホトトギスは中国南部などで冬を越し、日本には5月中旬ごろに渡ってくるので、昔から田植えを知らせる鳥と言われています。残念ながら、声はすれども姿を見たことがありません。鳩より小さくて灰色っぽい鳥だそうです。胸と腹は白く黒の横しまがあるそうなので出会ってみたいです。

目には青葉山ほととぎす初鰹（山口素堂）

山口素堂は、江戸時代の俳人です。この句には、青葉・ほととぎす・初鰹どれもが夏の季語です。①季重なり ②体言止めによる三段切れ ③字余りの助詞「は」の効果

さあ、この句の査定は？ 凡人か？ 名人に決まっていますよね。

目には青葉、（耳には）ほととぎす、（口には）初鰹 素晴らしい夏だという句です。

鳴かずんばそれもまたよしホトトギス（松下幸之助）

信長・秀吉・家康が詠んだのか後世の人が詠んだのかは知りませんが、それぞれ、鳴くということを期待しているから出てくることばです。つまり、鳴くということに皆こだわっていると思うのですよ。ぼくはね、何ごとでも、何かにこだわっていたら、うまくいかないと思っています。「鳴かずんばそれもまたよしホトトギス」。つまり、自然の姿でいこうというわけですよ。なかなかむずかしいことですがね。『人生談義』より



（令和5年5月21日）